

Title	無助詞文とは何か
Sub Title	
Author	小屋, 逸樹(Koya, Itsuki) 辻, 幸夫(Tsuji, Yukio)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の教養学： 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008. ) ,p.297- 312
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0297">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0297</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 無助詞文とは何か

小屋逸樹・辻 幸夫

- I はじめに
- II 無助詞とは
- III 無助詞文特有の意味
- IV 無助詞文の特徴
- V 無助詞文の成立過程
- VI まとめ

## I はじめに

日本語の助詞は、伝統的な国語学あるいは日本語学では品詞の一つとされているが、その種類と機能の説明は文法研究家の数だけあると言われるほど多種多様である。諸説の中で共通する部分があるとするれば、助詞は文法範疇である「機能語」や「付属語」として分類されるという点につける。つまり、助詞とは名詞や動詞（体言や用言）などの内容語ないし独立語を結びつける文法的な機能を有する後置詞（いわゆる「てにをは」）であり、屈折変化することのない膠着要素とされている点である。

助詞をこのような付属語とするならば、任意の文に助詞が「ある」場合と「ない」場合とでは、その文を構成する要素間の文法的関係と表しうる意味に差異の生じることが理解できる。従来の言語研究では、任意の文において助詞が伴わない現象（以後、無助詞と呼ぶ）について、通常は本来あるべき完全な文を想定し、その文からあるべき助詞が「省略」されている、あるいは「欠如ないし欠落」しているという観点に立ち論じられてきた。本論では、この助詞が「ない」という現象に注目するが、いわゆる無助詞文の様々な事例を概観した上で、広く普及している〈無助詞＝助詞の省略〉という単純な説明に疑問を投げかける。ある文法要素が「省略される」とか「欠落している」という見方は、形式的にも意味的にも完全な文を想定する文法観に立脚してはじめて成り立つものである。しかし現実の言語現象を観察すれば明白だが、文の生成は必ずしも完全な文や形式を最初から想定してなされるのではなく、必要とされる要素がオンラインで徐々に組み合わされ作り上げられていく。このため、「省略」という視点とは逆に、構成要素の文法的・意味的關係を明瞭にして精緻さを与える場合の助詞の「付加」という視点も必要になるだろう。逆に、有助詞と無助詞の現象には、それぞれの存在価値があることが推測されるので、助詞の付加や省略の可能性を示唆する操作的説明が妥当でない場合も考えられる。つまり有助詞と無助詞の現象を考察するためには、よりダイナミックな視点が肝要なのではないか。

## II 無助詞とは

日本語では、口語体を中心に、本来付着すべき助詞が欠けているかのよう  
に思われる文が存在する。まず、以下の例を見てみよう。

- (1) これはおいしい。
- (2) これ、おいしい。
- (3) おいしい。

言語表現の中には、(1)のように指示対象を提示し、膠着要素たる助詞を伴って任意の属性を付与する文のみならず、(2)のような本来存在すべき助詞が欠落したかのように思われる形式の文（以降、名詞句が起きながらも助詞が伴わない文を「無助詞文」と呼ぶ）や(3)のような指示対象すら明示されない文も存在する。上記の3文は、いずれも我々の言語生活において頻繁に用いられる文であるが、形式的な類似性をもつこれらの文は、何らかの操作を介して結びつけられると見なすべきであろうか。それとも、それぞれは独立した意味的価値を示す文として捉えるべきであろうか。前者の仮定に立てば、3文は「省略」という操作によって結びつけられ、(1)をベースに、その助詞を省略して(2)が得られ、さらに(2)から指示対象を示す表現を省略して(3)が得られる、という省略の方向性を想定することになろう。この立場では、(1)を十全な文と見なし、(2)や(3)はその簡略文として捉えられる。一方、上の3文は形式的な類似性を有するものの、それぞれ独立した文と見なす考え方も可能である。この場合、(1)から(3)への派生は前提とならず、それぞれの文が発話の状況に適して用いられたものとして捉えられる。例えば、(2)は、主語が措定された文(1)とは異なり、助詞「は」を付与しないことによって(1)とは区別される意味を表すために用いられる。また、(3)は、状況によって自明な指示対象に言及せず、それが「おいしい」と判断される属性をもったものであると発せられる。このような視点に立てば、(2)や(3)は決して(1)の省略形として存在するのではない。むしろ、3文は然るべき理由があって互いに異なった形式をとって

るものと考えられよう。

本稿では、(2)のように主語が無助詞で現れる文を中心に、無助詞文が(1)のようないわゆる十全な文から助詞を省略して得られたものではなく、有助詞文とは異なる意味を表す独自のステイタスをもつものであることを、特に認知科学的な知見を取り入れながら検討してみたい。

### Ⅲ 無助詞文特有の意味

無助詞文を「省略」の結果と見なす立場には、久野（1973）、筒井（1984）、甲斐（1991）、藤原（1992）の他、最近では高見・久野（2006）などがある。一方、「省略」の結果ではなく、「ハ」も「ガ」も使えない文として位置づけた尾上（1987/96）や「ゼロ助詞」として積極的な価値を認めた加藤（1997）、「無助詞が現れる」という見解をとっている丹羽（2004、2006）のような立場もある<sup>(1)</sup>。高見・久野（2006）の主張に対しては、小屋（2008）で批判的に検討したので、ここでは繰り返さない。本稿は、無助詞文を独自のステイタスをもつ文と考え、「省略」の結果とは見なさない立場をとるが、それには以下のような理由がある。まず、尾上（1987/96）が無助詞の存在文「はさみある？」で観察したように、無助詞は、「は」や「が」とは異なる表現効果を出したい場合に用いられると思われる例が多く存在することである。例えば、以下の文を比較してみよう（例文4は小屋2008から）。（以下では、無助詞であることを「 $\phi$ 」によって示す）

(4-1) 私 $\phi$ 困るんです。

(4-2) 私は困るんです。

(4-3) 私が困るんです。

(5-1) あの人 $\phi$ 変よ。

(5-2) あの人 $\phi$ は変よ。

(5-3) あの人 $\phi$ が変よ。

- (6-1) 田中君の奥さんが亡くなったんだって。
- (6-2) 田中君は奥さんが亡くなったんだって。
- (6-3) 田中君が奥さんが亡くなったんだって。

上の例では、無助詞文の意味は「は」や「が」を伴った文とは明らかに異なっている。例えば(4)の主語を「は」でマークすると、「他の人は困らなくても、私は困る」と対比的な意味が、また「が」でマークすると、「困るのは他ならぬ私だ」という総記的な意味が生じるが、(4-1)にはこのような意味は受け継がれてはいない。むしろ(4-1)は、他人の存在とは関わりなく、自分が困るという実情を訴えた文となっている。(5)と(6)に関しても無助詞文と有助詞文との意味の差は歴然としている。すなわち、(5-1)では、特定の人物「あの人」に対し、発話の瞬間に浮かんだ特徴的な属性「変」が直接結びつけられているが、(5-2)は「あの人」の属性を「変」だと解説する文であり、対比的な意味も感じられよう。(5-3)は明らかに総記的な意味を含むが、やや不自然な文だと言ってもいい。(6-1)は驚きをもって「田中君の奥さんが亡くなった」ニュースを臨場感をもって伝えているが、(6-2)と(6-3)では、(4)で観察された助詞に起因する意味が加味されているだけではなく、「驚き」という感覚的ニュアンスが生まれてこない。このように、無助詞文では有助詞文とは異なる意味が表現されており、両者を「省略」という操作を介して結びつけることは現実的ではない。「省略」と捉える立場では、なぜ無助詞が積極的に採用されているのかを説明できないばかりではなく、なぜ意味に変化が生じるのかを説明することもできない。その意味からも使用法からも、無助詞文は有助詞文の省略の結果としてではなく、独自の意味的価値を示す構文だと見なす必要がある。

#### IV 無助詞文の特徴

無助詞文では、主語が言わば独立語のように切り離されて現れる。指示対象がまず固定され、それに述語が与えられている場合が通常である<sup>(2)</sup>。注1に示したように、無助詞文の主語には直示的な表現が多く使用されるが、固

有名詞を伴った場合も、無助詞文では目前の人物を指しているニュアンスが強く感じられる。

(7-1) ベッカムφうまいね。（小屋 2007）

(7-2) ベッカムはうまいね。

(7-1) はテレビ等で実際にプレーをしている「ベッカム」を見ながらの発話であるとの感が強いが、(7-2) にはそのような臨場感がなく、談話の中で発せられた文だという印象が強い。無助詞文が、表現のみを、言わばブツ切りに羅列することで成立することは、無助詞文には現場指示的な特徴があるという事実とも符合する。つまり、現実の状況が与えられれば、文を分析的に組み立てて精緻化 (elaborate) しなくても事態が把握できる。いわゆる「ライブ的」な発話として十分にコミュニケーション機能を果たす訳である。このような性格は、無助詞文のさらなる特徴に密接に関わっている。それは、無助詞文では主語と述語が倒置されやすいという現象である。例えば、以下の例のように主語と述語を倒置しても極めて自然だと感じられるのは、主語と述語との結びつきがそもそも緩やかである無助詞文の特質を示しているものと言えよう。

(8) 困るんです、私。

(9) 変よ、あの人。

(10) 奥さんφ亡くなったんだって、田中君。

さらに、小屋 (2007) でも指摘した、無助詞文がいわゆる発話行為的な文の使用時に頻繁に現れるという点も注目される。下の (11-1) と (12-1) は共に状態を描写するコピュラ文の形式をとってはいるが、単なる事実の記述としてではなく、聞き手に教え諭すという行為にコミットする場合は、無助詞文は極めて自然である<sup>(3)</sup>。(以下の例文は小屋 2007 から)

(11-1) 国連の加盟国φ 192ヶ国です。

(11-2) ? 国連の加盟国  $\phi$  192 ケ国だ。(cf. 国連の加盟国  $\phi$  192 ケ国だよ。)

(12-1) スイスの通貨  $\phi$  ユーロじゃありません。

(12-2) ? スイスの通貨  $\phi$  ユーロではない。

行為と共に用いられるコピュラ文に至っては、無助詞文の方が口語表現としてより一般的であると思われる。以下の例を見てみよう。

(13) これ  $\phi$  スイスのお土産です。(相手に差し出す)

(14) あの人  $\phi$  新任の先生です。(特定の人物を指す)

行為を伴う文の場合は、当然ながら発話現場の臨場感があり、状況に助けられた発話となる。このような無助詞文の特徴を極限まで広げると、まさに(3)のような一語文にたどり着くであろう。ここでは指示対象が何かは話し手と聞き手ですすでに了解されており、情報として価値のある表現のみを簡潔に与えれば適切な発話となる。日常の言語生活ではよく耳にする表現であり、(3)のような最小限の要素からなる文は、他にも(15)や(16)のように多く存在する。

(3) おいしい。

(15) 火事だ!

(16) 見た?

## V 無助詞文の成立過程

前節の最後で触れた(3)、(15)、(16)のような表現は一語文的であり、一般に慣用的な表現が多く存在する。慣用的になるということには、それなりの理由や傾向がある。むろん、慣用表現とまでは言えなくても、日常的にこの種の表現は頻用される。例えば、行為に随伴する発話や、話し手・聞き手の間に共有情報が十分にある場合は、独立語(内容語)1語のみが使用さ

れ、複数の独立語が組み合わせられる場合においても助詞が付加されないことが多い<sup>(4)</sup>。話し手と聞き手の間にボールがあり、どちらかが相手にそれを取って欲しいという場合を考えてみたい。依頼者は(17-1)、(17-2)、(17-3)のように発話するのがごく通例であると考えられる。(17-4)のような発話は動作の対象となるボールの特定を確認する必要がある場合に、(17-5)のような表現はボールを授与する対象の特定が必要な場合に用いられる表現と言えるだろう。

- (17-1) ボール。
- (17-2) ちょうだい。
- (17-3) ボールちょうだい。
- (17-4) ボールをちょうだい。
- (17-5) 私に（ボールを）ちょうだい。

上記の例を考えると明らかだが、(17-1)、(17-2)、(17-3)のような独立語や無助詞文の事例を、(17-4)ないしは(17-5)のような有助詞文から助詞が省略された文であるというように、本来あるべき要素が省略されているという観点だけに立ち説明することには無理があるだろう。それぞれの文は、独立語や助詞の省略あるいは付加の結果から出来上がったものであるという単純な対応関係ではなく、何が文脈上共有される情報であり、何を言語化するのが効果的かつ効率的かという点で、それぞれが異なる意味を持ちうる別の表現であると理解する方が自然である。むしろ、言語の統語的な展開は、表現すべき内容を分析的なものにする際に新たな要素が組み入れられ、各要素の文法的関係を明確にするところにあるとすれば、(17-1)から(17-5)への方向性はまさに言語構造の精緻化を体現していると言うことができる。逆に、完全な文を想定すれば、本来は助詞が付加された方が精緻化の観点からも望まれる構造であっても、それでも違和感のない無助詞文が存在することには、それなりの理由がある。本稿の前節までに取りあげた事例を考えれば、無助詞とすることで臨場感を出したり、情報を共有する相手への要求時の自然な表現を形成したり、話し手や聞き手の特定が既知であり主題となる

ような場合などにも無助詞文が自然に存在するということが良い例であろう。

この点に関連して、子どもの言語における助詞などの機能語の発達過程を考えてみよう。子どもの言語の統語的・意味的構造は、全体的（一語文的）な表現から、分析的（多語文的）な表現へと展開することがわかっている。先の例で言えば、一語文期の子どもが発することばで（17-1）のように「ボール」という一語発話によって、〈ボールがあるね〉や〈ボールがあるよ〉というような、いわゆる三項関係が成立した子どもに特徴的な共同注意フレームに伴われる陳述や注意喚起を表現することがある（岡本 2001）。あるいは、大人も頻用するが、〈ボールをとって〉、〈ボールを転がして〉、〈ボールが欲しい〉のような依頼や要求の意味を表すこともできる。子どもは場面に密着して抱く様々な表象を、既知の限られた数の語で表現する。このため大人から見ると単語ひとつの形式で、大人が発する様々な文に相当するような意味を表すことになる。従って、一語文（あるいは一語発話）とは、あくまで言語構造の知識を構築している大人の視点による命名である（辻 1996）。ただし、一語文とはいえ、子どもが発する語は動詞の活用形や、名詞に終助詞や接続助詞のついた形式が多い。子どもはまだ活用形や接語の体系を知っているわけではない。単に、周りで発せられる頻度の高い表現を塊として覚えて使用しているに過ぎないが、視点を変えれば言語の創造的な使用であり、新たな語や構造の習得準備が整ってきたとも言える現象である。

ところで上記の（17-3）の「ボールちょうだい」のような無助詞文は二語からなる構造だが、言語発達途上にある子どもにとっては必ずしも省略文であるとは言えない。この構造が二語から成り立っていることを子どもが知っているとは限らないからである。二語文期初期の子どもは、「ジュースちょうだい」や「ブーブちょうだい」などいくつかの無助詞文を発することができる。ところが、同一形態の「ちょうだい」を軸として、組み合わせの語を入れ替えて無助詞文を作り上げるような分析的な言語使用を当初から見せることはない。同時に、任意の無助詞文について、「ジュースをちょうだい」のように有助詞の類似の意味を持つ十全な文を無助詞文に先行して発することもない。特定の場面に対して特定の表現を使用するのであり、分析的類推による言語構造に関するスキーマ（つまり、大人にとっては二語からなる文法

構造)の形成には、十分な言語刺激と時間が必要とされる。こうした現象は言語発達段階において一般的に見られることである (Tomaseello 2003)。

一方、助詞の出現が観察されるのは終助詞が最初で、二語文期の始まる18ヶ月齢から24ヶ月齢の間である。この間に、接続助詞、格助詞というように助詞使用が発展することが観察されている (小椋 1999)。言語使用において複数の要素を結合して、いわゆる句や文と呼ばれるような長さの言語連鎖を処理するためには、その連鎖を保持して適切な意味の復元を行う作動記憶と認知能力の発達が要求される<sup>(5)</sup>。二語文期に入る頃には、このような能力と同時に、すぐれたメタ認知能力や抽象的な思考の萌芽があり、統語的スキーマの発見と構築が可能になるのである。

助詞は複雑な意味表象の表現を可能にする精緻化の道具であるが、助詞のカテゴリー構造を習得した後であっても有助詞文と無助詞文が終生にわたって共存するように、無助詞文の存在意義は助詞の習得後も依然として残存する。機能語(助詞)の個体発生の過程に鑑みれば、無助詞と有助詞の共存は、「付加なのか、省略なのか」という視点だけではなく、それぞれが独自の意味を表すために有用な形式として存在するという観点からの説明が必要であることを示唆している。

## VI まとめ

以上、主語が無助詞で現れるケースをはじめとして、有助詞文と無助詞文との意味的差異、及びその使用上の差異を簡単に検討し、併せて無助詞文の成立過程を概観した。本稿の主張から明らかなように、無助詞文が有助詞文と並んで積極的に用いられるのは、発話の状況における要請が異なるためである。無助詞の使用というのは、話し手と聞き手の間に存在する発話の理解に最適かつ合理的な文の使用法と密接に結びついている。文法の発達に伴い、助詞使用による意味と形式の精緻化が成立した大人であっても、なお無助詞文を多用するのはこのためである。無助詞と有助詞の併存は、限られた系列的な統語形式の中に、いかに複雑なものごとの捉え方と意味表象を埋め込むかという要請に応える工夫の現れである。従って、文の構造から見て「完全

な文から不完全な文へ」という派生を設定するのみでは、無助詞現象のダイナミックな使用の本質を捉えることはできない。今後の無助詞現象の研究には、なぜ無助詞が要請されるのかといった、人間の言語の産出と理解のプロセスを射程に入れた視座が求められるだろう。

- (1) 注としては少々長くなるが、先行研究のまとめとして、小屋（2008：50）で整理したものを記しておこう。以下の諸特徴には重複するものがあることをあらかじめ断っておく。
- a. 対照の機能をもつ「ハ」は、焦点となるので省略できない（筒井 1984）  
「\*僕 $\phi$ 行くけど、山田君 $\phi$ 行かないよ。」
  - b. 存在・情意・可能の質問文で無助詞となる（尾上 1987/96）  
「はさみ $\phi$ ある？」「お茶 $\phi$ 飲みたい？」「中国語 $\phi$ わかる？」
  - c. 教え・勧め・同意要求・質問・感嘆などの文で無助詞になりやすい（尾上 1987/96）  
「これ $\phi$ 君のだよ。」「(花屋で) チューリップ $\phi$ 、きれい！」
  - d. 主語に「この」「あの」などの指示語をもち、発話の現場から切り離すことができないものが無助詞になりやすい（尾上 1987/96）  
「このチョコレート $\phi$ おいしいな。」
  - e. 感情、希望、意向、意志、事情説明などにおける一人称詞や、命令、要求、依頼、禁止、相手状況評価などにおける二人称詞は無助詞になりやすい（尾上 1987/96）  
「ほく $\phi$ 、さびしいな。」「あんた $\phi$ 泣いてんのね。」
  - f. 新たに題目を立てる場合に無助詞が現れやすい（尾上 1987/96、益岡・田窪 1992、丹羽 2006）  
「あれ？ このお皿 $\phi$ 欠けているね。」（丹羽 2006）
  - g. 「Xは」の「X」が1・2人称の方が3人称に比べて「ハ」が省略されやすい。また、終助詞などをつけて「聞き手への配慮」を示し、一方的な主張を和らげる場合は「ハ」が省略されやすい（甲斐 1991）
  - h. 無助詞は「取り出し」機能をもち、聞き手の注意を喚起する「信号性」や、対比性・排他性を不問にして中立的に取り出す「やわらげ」の機能をもつ（長谷川 1993）  
「私 $\phi$ 、がっかりしちゃったわ。」「コーヒー $\phi$ 飲みます？」

- i. 無助詞になるには、発見すると同時に発話する状況が重要 (大谷 1995)  
 「お母さん、今、あの猿 [φ / が / ? は] 木から落ちたよ。」
- j. あらかじめ措定をしてある「ハ」に対し、無助詞の「取り出し」機能は、発話の時点で取り出し設定する。分析的に述べないことが、コミュニケーション上の効果となって現れる (丸山 1996)  
 「今日の空φ、青いね。」
- k. 焦点になっている要素は無助詞にしにくい (加藤 1997)  
 「(会議に必要なメンバーが揃わない。誰の責任かについて話している) 山下 [が / \* φ] 悪いんだよ。ちゃんと連絡してないんだから。」
- l. 無助詞の機能は「脱焦点化」である (加藤 1997)
- m. 無助詞は総称名詞句には現れにくい、眼前の描写や経験に基づいた叙述には現れうる。無助詞には現場的性格がある。(丹羽 2004, 2006)  
 「京都 [は / ? φ] 古い街だね。」 「京都 [は / φ] よかったね。」  
 上の諸特徴を要約すると、無助詞で起こる文というのは、まず助詞でマークされない名詞句が焦点となる情報を表していない上に、発話が極めて現場指示的に出来事や状態を描写している「ライブ的」な場合に典型的に見られると言えるだろう。
- (2) 無助詞で現れる主語は指示的名詞句とは限らない。いわゆる指定文における変項名詞句も以下の文に見られるように無助詞で現れる。
- (i) 「事務長φ、田中さんなんだって。」  
 上の文では、変項を含む名詞句が無助詞で現れ、第2名詞句が変項を埋める値として機能している。
- (3) 発話行為とは関連づけていないが、同様の観察は高見・久野 (2006) にも見られる。
- (4) 話し手・聞き手の間の共有情報となっていることが言語化される際には、助詞のない事例が生じる (Masunaga 1988)。また、情報が既知あるいは予測の範囲内である場合は助詞だけではなく独立語のない場合が可能である。例えばバスを待つ場合、「あ、来た」、「あ、バス(が)来た!」は独立語のみ、無助詞文、有助詞文のいずれも使用可能である。しかし、「あ、救急車(が)来た!」を考えると、無助詞文は幼児の発話ではあり得るが、バスのように来ることが共有知識ないし予測の中にはないので、通常は、大人の発話では有助詞文のみが可能である。
- (5) 失文法を呈する失語症では機能語が脱落する傾向があり、日本語使用者の場合は助詞の脱落が顕著に見られる (例えば藤田 1991)。原因は様々だが、患者は必要な言語情報を作動記憶内に保持することに障害があることが多く、長文の産出に困難が

あると考えられている。一般に失文法は非流暢性失語と見なされており、必ずしも言語学で考えるような純粋な文法が想定されて、その障害だと考えられているわけではない（例えば Goodglass & Blumstein 1973）。したがって失文法は現象として文法を喪失したかのように見えるが、実体はそれほど単純なものではないと考えられている（山鳥・辻 2006）。

### 参考文献

- Allerton, D. J. & I. Koya (2003) "Prepositional Predicatives in English". *English Studies* 84. pp.80-93.
- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける『無助詞』の機能」『日本語教育』80
- 藤田郁代 (1989) 「失語症患者の構文の産生力の回復メカニズム」『失語症研究』第9号 pp. 237-244.
- Goodglass, H. & S. Blumstein (1973) *Psycholinguistics and Aphasia*. Johns Hopkins University Press.
- 甲斐ますみ (1991) 「『は』はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化研究』17 大阪外国語大学
- 上林洋二 (1984) 『措定と指定—ハとガの一面—』筑波大学修士論文
- 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文」『筑波大学文芸言語研究・言語編 14号』pp. 57-74.
- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書店
- Koya, I. (1992) *Subjecthood and Related Notions: A Contrastive Study of English, German and Japanese*. Birkhauser Verlag.
- 小屋逸樹 (1995) 「コピュラ文の意味構造」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』第99号 pp. 23-54.
- 小屋逸樹 (2002) 「トートロジーと両義性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第34号 pp.1-25.
- 小屋逸樹 (2003) 「もう一つのコピュラ文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第35号 pp. 43-67.
- 小屋逸樹 (2005) 「指示性と主語性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第36号 pp. 121-139.
- 小屋逸樹 (2007) 「無助詞コピュラ文：その発話行為的性格について」『慶應義塾大学言

- 語文化研究所紀要』第 38 号 pp. 1-20.
- 小屋逸樹 (2008) 『「私、困るんです。」—無助詞構文と発話のモード』慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』第 128 号 pp. 45-67.
- 熊本千明 (1989) 「指定と同定—「…のが…だ」の解釈をめぐる」大江三郎先生追悼論文編集委員会 (編) 『英語学の視点』 pp. 307-318. 九州大学出版会
- 熊本千明 (1995) 「同定文の諸特徴」『佐賀大学教養部研究紀要』第 27 卷 147-164.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2 号、p77-93
- Makino, S. & M. Tsutsui (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 丸山直子 (1996) 「話しことばにおける無助詞格成分」日本認知科学会第 13 大会ワークショップ「日本語の助詞の有無を巡って」  
<http://logos.mind.secs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama.html>
- Masunaga, K. (1988) Case deletion and discourse context. W. Poser (ed.), *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, 145-156. Stanford: CSLI.
- 西山佑司 (1988) 「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 20 号 pp. 115-136.
- 西山佑司 (2000) 「倒置指定文と有題文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 32 号 pp. 71-120.
- 西山佑司 (2001) 「ウナギ文と措定文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 33 号 pp. 109-146.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 丹羽哲也 (2004) 「主語と題目語」尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 文法 II』朝倉書店
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』和泉書院
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- 岡本夏木 (2001) 「心理学から見た言語と認知の発達の概略と今後」辻幸夫 (編) (2001) 所収 pp.180-192.
- 尾上圭介 (1987) 「主語にハもガも使えない文について」『国語学会予稿集』日本国語学

会

尾上圭介 (1996) 「主語にハもガも使えない文について」 日本認知科学会第 13 大会ワークショップ「日本語の助詞の有無を巡って」

<http://logos.mind.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html>

大谷博美 (1995) 「ハとガとゆーハもガも使えない文」 宮島・仁田 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 くろしお出版

小椋たみ子 (1999) 『初期言語と認知発達の関係』 風間書房

高見健一・久野暉 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店

辻幸夫 (1996) 「意味の習得」 『英語の意味』 pp. 135-156. 大修館書店

辻幸夫 (編) (2001) 『ことばの認知科学事典』 大修館書店

辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社

辻幸夫 (編) (2003) 『認知言語学への招待』 大修館書店

辻幸夫 他訳 (2008) 『ことばをつくる：言語習得の認知言語学的アプローチ』 慶應義塾大学出版会 (Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA.: Harvard Univ. Press.)

筒井通雄 (1984) 「『ハ』の省略」 『言語』 13 卷 5 号 大修館書店

山鳥重・辻幸夫 (2006) 『心とことばの脳科学』 大修館書店

#### [付記]

本稿の執筆に際しては、平成 20 年度文部科学省科研費 (「分裂文に関する意味論的・語用論的研究」 研究代表者：西山佑司) から助成を受けた。